

収蔵展「浜松の幅広い文芸人たちⅡ」のご案内

ご好評をいただきました企画展「内山牛松が物語る河童の絵」は8月26日で終了となりました。期間中、遠方からもお越しくださり、多くの方々にご覧いただきましたこと感謝申し上げます。

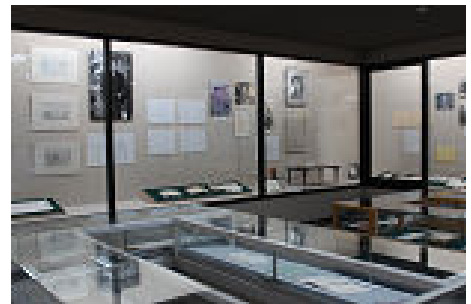
さて、9月8日(土)からは「浜松の幅広い文芸人たちⅡ」と題して、浜松文芸の先駆者を幅広いジャンルから紹介しております。同じタイトルで行った春の展示では、現在活躍中の小説家も交え、時代を超えた縦の幅の広さをテーマにしましたが、今回は横の広がりにより主眼を置いて展示をしました。

前回展示した4人の先駆者については展示品をさらに充実させ、新たな面をご紹介出来るように努めました。さらに今回は、女性の自立を謳った鷹野つぎ、書画・文筆活動、映画出演等一人で幅広い活動に取り組んだ山根七郎治に関する展示を加えました。

幅広い浜松の文芸をぜひお楽しみください。

＜主な展示品＞

- ☆加藤雪腸(歌人俳人)・・・正岡子規選評 巻物
啄木・虚子からの書簡
同人誌『落葉松』 他
- ☆柳本城西(歌人)・・・犬蓼短歌会詠草
『犬蓼』復活一号・二～十二
『犬蓼』城西追悼特集号 他
- ☆鷹野つぎ(作家)・・・愛用の机
自筆原稿 2点
平塚らいてうからの葉書・平林たい子からの封書 他
- ☆山根七郎治(書画・文筆活動、映画出演)・・・額装(画) 12点
愛用の絵道具 自筆原稿「映画余談」 他
- ☆清水みのる(作詞家)・・・レコードジャケット
自筆原稿 3点
- ☆小百合葉子(劇団創設者)・・・花の絵の色紙帖・写真アルバム
愛用品 ○夫人児童演劇賞盾 他



文芸館の四季

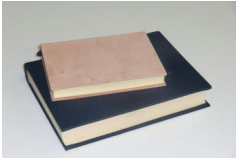
文芸館には猛暑といわれる日でも、空気がヒンヤリと感じられる場所があります。事務室西側の、建物とフェンスとの間の通路です。そこはニセアカシアなどの木々が、まさに天然の緑のカーテンとなって一日中直射日光を遮り、南西から吹き抜ける風が涼をもたらしてくれます。

ただし、長居出来ないのが難点です。そこに住みついている藪蚊が目ざとく見つけ、代価を求めて群がってくるからです。

そう言えば、今年は無防備のままよく蚊に刺されました。以前の蚊ならブーンという羽音が耳に届き、チクリと感じたとたんに、ピシヤリと行ったものですが、最近の蚊は羽音もたてません。また、チクリという感触も無く、腫れた部分を眼にして、そのとたん痒みが襲ってくるのです。

蚊が進化したのか、はたまた自分のすべての感覚に衰えが生じたのか・・・私の、今夏最大の問題事となりました。





井上靖、浜松中学受験

湯ヶ島の豊かな自然の中で、毎日毎日楽しく遊び暮らしていた靖が、浜松へ来て人が変わったように真剣に勉強するようになったのは、父母の監視下にあったこともあるが、次のような理由によることの方が大きいようだ。

私は自分が中学生になりたいと思い、そうしたことで勉強したのではなかった。また今度も中学校へ入れなかったら、自分が今まで育ってきた郷里の田舎に対しても、田舎の小学校に対しても悪いという気持ちの方が強かった。母からも田舎の子は困ると言われたが、学校に於ても、教師から同様のことを言われた。

「君の前の小学校では何を教えていたんだい？」

若い教師に言われると、私は辛かった。そしていつか自分のためというより、田舎の小学校のために、何とかして入学試験にだけはパスしたいと思った。(「帽子」)

入学後しばらくは、ここに書いてあるように目立つくらい靖の学力は低かったのである。入試倍率のことを考えると「到底自分の実力では競争者を排し得ようとは思われなかった」状況にあったようだ。

田舎の学校やそこに育った靖を非難した両親の心の奥には、親の意向を無視してきたかの(祖母)や靖への悔恨の思いもあったのであろう。靖にはそれがわかったはずだから余計落ちたくなかったに違いない。

昭和12年2月に書いた「試験について」というエッセイに、浜松中学受験時の忘れられぬ出来事を書いている。

自分より一列前の右側に坐っていた少年がカンニングをしているときの顔である。(略)教師の隙を窺いながら、時折、そっと敏捷に地理の本をめくる狐のようなその狡智の表情である。子供心にはそら恐ろしく感じただけであったが、今考えると寧ろ青い妖気を持っていて一種の美しさを感じる位である。

この出来事はどちらの年の入学試験の時のことだったかは不明である。試験が終わって、靖は満足すべき出来ではないことを悟り、また一年浪人することの辛さより、郷里の小学校の威信を回復出来なかったことを悲しんでいる。

私は試験場から出ると、初めてその日解放された気持で、寒さの薄らいだ早春の浜松の町を歩いた。町を歩くのは初めてと言ってよかった。私はこの町へ来てから、小学校と自分の家を往復する以外、どこへも出歩かなかった。町の洋服屋はどこも中学校の制服と学帽とを飾窓に出してあった。私は洋服屋がある度に一軒一軒飾窓を覗いて歩いた。

その日の靖少年の心境がいろいろと偲ばれる一文である。